世界名作劇場

プリンセス

小公女セーラ

『プリンセスの誕生日』

第 11 話

制 作　日本アニメーション
　　　　フ ジ テ レ ビ

登場キャラクター（第11話「プリンセスの誕生日」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
バロー弁護士
ベッキー
ピーター
マリエット
アーメンガード
ロッティ
ラビニア

ジェシー

ガートルード

ジェームス

モリー

花屋のおばさん

ジャンプ（小馬）

ボナパルト（オウム）

エミリー（人形）

シーザー（猫）

1 コベント・ガーデン（朝）

行き交う野菜車や、買出し人の喧噪――

2 同・花屋の前

人混みを分けて飛び込んで来るピーター。

ピーター「おばさん、花頼むよ！ いい花択んで、ありったけ欲しいんだ！」

おばさん「（驚く）どうしたんだい、ピーター。お祭りでも始まるのかい」

ピーター「違うってば。セーラお嬢様の誕生パーティがあるんで、院長先生に頼まれてるんだよ」

おばさん「ヒャァ、あのプリンセス様みたいなお嬢様の……」

ピーター「そうさ。急いで頼むよ！」

おばさん「ようしきた、あんたの御主人のお祝とあっちゃ、大サービスしてあげるからね！」
ピーター「ありがとう、おばさん……」

3　ミンチン女学院・表

ジャンプの馬車に、山のように花を積んで帰って来るピーター。

4　同・遊戯室

女生徒全員が大騒ぎでパーティ会場の飾りつけをしている。
中央に並べたテーブルに、白布をかける女生徒たち——
「もっと引っぱって」「こっちこっち」

壁に色とりどりの紙テープを貼るアーメンガード――

アーメンガード「誰かテープとってェ」

飾ろうとしたヒイラギで指をさすロッテイ――

ロッテイ「痛ッ……痛いよオ（半ベソ）」

横長の大きな紙に、

「HAPPY BIRTHDAY」

と書きかけているジェシーとガートルード――

ジェシー「わあ、失敗しちゃったァ！」

後手でなにもしないラビニアに、

ガートルード「ね、ラビニア、書いてよォ」

ラビニア、肩をすくめる。

ラビニア「ごめんだわ、セーラの誕生パーティのお手伝いなんて」

ジェシー「えええ？」

そこへ花籠を抱えたピーターが入って来る。

ピーター「お待ち遠さまァ！　花が届きましたよォ」

歓声をあげて集るアーメンガード、ロッテイ以下の女
生徒たち――
ラビニア「フン、こんなパーテイ開くなんて大袈裟よ。ミンチン先
生もミンチン先生だわ！」

5　同・地下の階段

ミンチンが裾をつまみ、降りて来る。
ミンチン「モリー！……ジェームス！」

6　同・台所

料理に忙がしいジェームスとモリーが、驚いて振返る。
モリー「院長先生……御用でしたらおうかがい致しますのに」
ミンチン、近づく。

ミンチン「いいのよ。誕生パーティの特別料理は進んでいるでしょうね」
ジェームス「へえ、腕によりをかけまして」
ミンチン「どれ、お味拝見……」
スプーンをとって、鍋からシチューをすくい、味を見る。
唖然と顔を見合せるモリーとジェームス。
ミンチン「ムーン……とてもいいお味、これならセーラさんもきっと喜ぶわ。ローストビーフの方も腕をふるってね」
ジェームス「へ、へえ、そりゃもう……」
ミンチン「アメリア！……アメリア！」
呼びながら出て行く――
再び唖然と顔を見合せるモリーとジェームス。
モリー「どうしちゃったんだろ。生徒の食事の味なんて、見に来た事もない人がさ」

ジェームス「ああ、まるで自分の誕生日みてえに浮かれちまってよ」
モリー「ま、あのセーラお嬢さんが、ダイヤモンド鉱山の後継ぎになると決ったんだから、院長先生だって浮き浮きするさね」
ジェームス「へッ、お蔭でこっちは、忙がしくなるばっかりだ」
モリー「なあに、そのうちこっちもお給料をあげて貰えるよ。あの大金持ちのセーラお嬢さんのお蔭でね」
ジェームス「違えねえ」
笑うモリーとジェームス——

7

同・セーラの部屋

鳥籠のボナパルトが叫ぶ——
ボナパルト「セーラ……セーラ……」
マリエットが、セーラに、ミンチンが買った服の着つけをしている。

傍に、花で作った王冠を手に控えているベッキー。

セーラ「ね、マリエット……私、院長先生が誕生日のパーテイを開いて下さるのは嬉しいのだけど、大袈裟なのは困るわ。もっと普通でいいのに……」

マリエット「でも、お嬢様。院長先生は、お嬢様をとても大切な生徒さんだとお考えなんですわ。だって、お嬢様は、ダイヤモンド鉱山の……」

セーラ「マリエット……それはお父様のお仕事よ。その事で私が特別扱いになるなんて変よ」

その時、ノックの音――

ベッキー「はい……」

ドアが開き、アメリアが入って来る。

アメリア「まあ、セーラさん。なんてよく似合うんでしょう。ほんとにプリンセスみたいよ」

セーラ「まあ、アメリア先生……」

アメリア「さ、院長先生がお待ちよ。あなたに買ったその服を着た所をごらんになりたいんですって……あ、ベッキー、あとでピーターを呼んでね」

ベッキー「は、はい、アメリア先生……」

8

同・院長室

鏡の前で、着飾ったミンチンが、身づくろいをしている。

ノックの音――

ミンチン「どうぞ……」

ドアが開き、アメリアと、花の王冠を手にしたセーラが入って来る。

アメリア「お姉様、セーラさんのお支度がすみましてよ」

ミンチン、セーラを見て満足気に微笑。

ミンチン「まあ、とても結構よ。矢張り高級店で求めただけの事はありますよ、セーラさん」
セーラ「（困惑）はい、有難うございます。院長先生」
アメリア「じゃ、私は会場の準備を見て参りますわ」
　アメリア、出て行く。
ミンチン「（微笑）セーラさん……今日は、一般生徒たちの誕生日と違うのですからね……あなたの為に盛大なパーティを用意しているのですよ」
　ミンチン、ふと一方のテーブルを振り返る。
ミンチン「そうそう、お父様の名前で、ハムレーズから贈物が届いていますよ」
セーラ「まあ、お父様から……嬉しい……」
　テーブルの上に置かれたひと抱えもあるリボンの包装箱に駆け寄る。
　その時、ノックの音――

ミンチン「お入り……」
ドアが開き、ベッキーとピーターが立つ。
ミンチン「あ、その箱をパーティの部屋に運ぶように……」
ピーター「はい、院長先生……」
ピーターとベッキー、入ると左右から包装箱を捧げ上げる。
ミンチン「さ、セーラさん。プリンセスらしくお花の王冠をかぶって……参りましょう」
セーラ「はい、院長先生……」

9	同・遊戯室

部屋中に、ヒイラギや色紙テープが張られ、ジェシーたちが書いた——
「HAPPY BIRTHDAY

「PRINCES SARA」の横断幕の紙が張られている。

アメリア「さ、これでいいわ……皆さん、並んで下さい」

女生徒たち、人口を迎える形に並び、アメリアはオルガンにつくと、バースディの曲を弾きはじめる。

一斉に唄う女生徒たち――

ドアが開き、花の王冠をつけたセーラの手をとったミンチンが、おごそかに入って来る――続いて、包装箱を捧げたピーターとベッキー。

合唱とオルガンが終り、女生徒たち一斉に拍手する。

微笑で会釈を返すセーラ。

ピーターとベッキーが包装箱をテーブルに運ぶ。

ミンチン「さ、あなた方は退ってよろしい」

ピーター「は、はい……」

ためらったが、ポケットから、小さな紙包みを出すと、

セーラに差し出す。

ピーター「あの、お嬢様……これ、お祝いにと思って、市場で買ったんです」

セーラ「まあ……」

セーラ、受取って紙包みを開く。

——出て来る小さなオカリナ。

どっと嘲笑するラビニアたち。

セーラ「ありがとう、ピーター」

ミンチン「さあ、あなた方がいる所ではありません、お退り」

セーラ「院長先生……」

ミンチン「なんでしょう、セーラさん」

セーラ「ベッキーとピーターをここに居させてあげてはいけないでしょうか」

ミンチン「なんですって？」

ピーター「お、お嬢様……」

ベッキーも驚く。

セーラ「ベッキーも、私にとても可愛い針さしをプレゼントに作ってくれたんです」

ベッキー「お、お嬢様……」

セーラ「私、ベッキーとピーターにも、今日のパーティのお客様になって貰いたいんです。お願いです。院長先生……」

ざわめく女生徒たちや、不満の声を出すラビニアたち。

ミンチン「静かに！ 静かになさい！」

女生徒たち、静まる――ミンチン、アメリアと顔を見合せたが、微笑をつくる。

ミンチン「セーラさん、あなたはなんと思いやりの深い方なんでしょう……ま、今日はあなたの誕生日なのですから、特別にあなたの願いを許す事に致しましょう」

セーラ「まあ、よかった……」

ミンチン「ベッキー、ピーター、セーラさんに感謝すべきですよ」

ベッキー「有難うございます、お嬢様……」
ピーター「有難うございます……」
ミンチン、改めて一同を見渡す。
ミンチン「さて、皆さん……今日は、セーラさんの素晴らしい誕生日です……皆さんが名付けたように、セーラさんは、ダイヤモンドプリンセスとして、将来、お父様のダイヤモンド鉱山の後継ぎとなられる方ですね。その莫大な財産は、いつかきっと、社会に役立つ立派なこと、例えば、学校や教育の為に使われるだろうと思います……なぜなら、それがセーラさんの美しいつとめだからです……」
ジェシーたちに囁くラビニア――
ラビニア「この学校のことよ」
ミンチン「そのようなセーラさんをお友達に持てた事を、皆さんも私たちも感謝しなければなりません。では、セーラさんに、心をこめてお祝いの言葉を送る事に致しましょう。」

セーラさん、お誕生日、お目出度う」
一同「お誕生日、お目出度う」
セーラ「有難う、皆さん、それから院長先生……こんな嬉しい誕生パーティを開いて下さった事をとても感謝しています。本当に有難う……」
一斉に拍手する女生徒たちと、ミンチン、アメリア――
――その中で独り表情の硬いラビニア。

10 同・表

辻馬車と、続いて人夫達を乗せた大型荷馬車が着く――
――辻馬車から降りるバロー弁護士、せかせかと戸口へ。

11 同・遊戯室

女生徒たちに囲まれて、テーブルの大型包装箱を開く
セーラとミンチン。
現われる三階建の精巧なドールハウス。
女生徒たち、思わず嘆声をあげる。
「お人形の家よ」「すてき！」「見せてェ」

× × ×

壁際で、伸び上って窺うベッキーと、ピーター。
ドアが開き、モリーが入って来る。
モリー「院長先生、弁護士のバロー様がお見えでございますが」
ミンチン「バローさんが？」
モリー「はい、応接間にお通し致しましたが」
アメリア「お姉様、屹度セーラさんのお祝いに来て下さったのよ。
御案内しなくては」

12 同・応接室

急いで入って来るミンチンとアメリア。

ミンチン「まあ、バローさん。ようこそ……」

アメリア「パーティは、たった今はじまった所ですわ。さ、どうぞ」

バロー、ジロリと振向く。

バロー「ミンチンさん……私は、あの娘の誕生祝いなんかに来たんじゃありませんぞ……あの娘に関する重大な事態を伝えに来たんです」

ミンチン「なんですって?!」

怪訝に見るミンチンとアメリア

――C・M――

13

同・遊戯室

ドールハウスを囲んで覗き込んでいるセーラと女生徒たち。

ロッティ「見せて、見せてエ！」

遠くから背のびして見たがるベッキー。

アメリアが入って来る。

アメリア「あ、セーラさん……バローさんがこのお部屋で、院長先生とお話があるんですって……誕生祝いのお食事が出来てますから、皆と食堂へ移りましょうね」

セーラ「はい、アメリア先生……」

セーラと女生徒たち、騒ぎながらアメリアと出て行く。

取り残されるベッキー、ドールハウスが気になる。

ドア口から、

ピーター「ベッキー、仕事だよ、行こう」

ベッキー「え、ええ……一寸だけ、あれ見てから……」

ピーター「仕様がないなあ。行くよ」

ピーター、去る。

ベッキー、そっとドールハウスに近づくと覗き込む――

ベッキー「まあ……本物みたいス……」

思わず内部に触れてみる――

その時、廊下にミンチンとバローの声。

はっとなったベッキー、逃げようとうろたえ、咄嗟に白布の垂れたテーブルの下に潜り込む――

同時にドアが開き、入って来るバローとミンチン、続いてアメリア――

バロー、苦々し気に見廻す。

バロー「ふむ……あんな娘のために、なんと云う馬鹿な金を使ったものだ」

ミンチン「なんですって？」

バロー「いや、あんたも私も、無駄な金を使ったものだと云ってるんですよ」

バロー、ドールハウスに近づくと屋根をバンバン叩き、

バロー「このドールハウスは、あの娘の父親に手紙で依頼されて、この私が届けさせたものですわい」

ミンチン「まあ……」

バロー「全く、あの馬鹿な父親め、眼の玉の飛び出る程の買物をさせおって……」

ミンチン「なんて事を仰言やるんです。セーラさんのお父様は、この学校にとって大切な後援者なんですよ……第一、いくら高い買物でも、代理人のあなたはそのお金を請求すればよろしいでしょう」

アメリア「そうですわ、なにしろ、セーラさんのお父様は、世界有数のダイヤモンド鉱山の持主でいらっしゃるんですもの」

バロー「ダイヤモンド鉱山ですと？　そんなものがどこにあると云

うんです」

アメリア「あの、お話では、インドのゴルコンダとかに……」

ミンチン「バローさん……セーラさんの事で重大な事態とか申されましたね。一体なにを仰言やりに見えたのです」

バロー、ジロリとミンチンをみつめる。

バロー「驚いてはいけませんぞ、ミンチンさん……ダイヤモンド鉱山なんて、どこにもありはしなかったんです」

ミンチン「な、なんですって……」

× × ×

テーブルの下で――愕然と聞くベッキー。

× × ×

バロー「ミンチンさん……あの馬鹿なクルーめは、ダイヤひと粒出ないボロ鉱山に、全財産をつぎ込んで、破産したんですわい」

ミンチン「（愕然）破、破産……まさか……」

バロー「さよう。もっと悪い事にだ。あの男は、インドの奥地で、
熱病にかかって死んじまったんです！」
ミンチン「死、死んだ……おおお………」
頭をかかえてよろめくミンチン、倒れかかる。
アメリア「お姉様！」
咄嗟に抱きとめるアメリアとバロー。
バロー「いかん、アメリアさん、水を！」
アメリア「は、はい……」
急いで水差しに走る——
×　×　×
テーブルの下で——茫然と聞くベッキー。

14

同・地下の食堂

女生徒たちに囲まれて、特大ケーキのローソクを吹き

消すセーラ――

一斉に拍手するロッティ、アーメンガードたち。

ぐったりと椅子に凭れて息をつくミンチンを水カップ片手のアメリアがハンカチであおいでいる。

前にバロー。

バロー「ミンチンさん……私もインドへ何度も電報を打ったが、ナシのつぶてですわい……だが、あの男の運命が判った以上、こちらも手を打たねばならん……兎に角、この高価な買物は、引揚げさせて貰いますからな」

バロー、ドールハウスを抱えると出て行く――

茫然と見送るミンチンとアメリア。

ミンチン「な、なんと云う事に……」

ミンチン、よろめき立つ――

ミンチン「アメリア……セーラに教えてやるんです……父親が死んで、一文なしになった事を……」

アメリア「えっ……」

ミンチン「アメリア！　あの文なし娘は、今、私が買った服を着、私が大金をかけた誕生パーティでタダで呑み食いしてるんですよ」

15　同・食堂

大きなローストビーフを切るジェームスと脇にモリー、囲んだセーラと女生徒たち、歓声をあげる――

16　同・遊戯室

ミンチン、怒りがこみ上げて来る。

ミンチン「アメリア！……あの娘に全てを教えて、この学校から叩き出してやるんです」

アメリア「そ、そんな……お姉様は、いつも私に嫌な事ばかり押しつけて……」

ミンチン「行くんです、アメリア！」

×　×　×

テーブルの下で——悲しみに耐えていたベッキー、遂にわっと泣き出す。

×　×　×

その声に、はっとなるミンチン、急いでテーブルの白布を引きはぐ。

——泣いているベッキー。

ミンチン「(愕然) ベッキー……！」

アメリア「(も愕然) まあ……」

ミンチン「こんな所でなにをしてたんです」

ベッキー「(泣く) 私……私……」

ミンチン「出ておいで！　さ、早く！」

いきなり腕を摑んで引きずり出す。

ベッキー「お、お許し下さいまし……私、人形のお家を拝見してたス……そしたら、院長先生の声が聞えたんで、夢中でこの下へ」

ミンチン「なんですって?……じゃ、お前はずっとここで」

ベッキー「お許し下さいまし……聞こうとしなくても、聞えてしまったス……私……私……セーラお嬢様がお可哀想で……(泣く)」

茫然と見るミンチンとアメリア。

ベッキー「お願いでございます、院長先生……セーラお嬢様を追い出さないで下さいまし……私、お嬢様のためなら、どんな事でもするつもりです。お願いでございます……」

ミンチン「許しません!……さ、出てお行き! でないとお前もクビにします!」

ベッキー「は、はい、院長先生……」

ベッキー、泣きながら出て行く。
見送ったミンチン、アメリアを見返る。
ミンチン「アメリア！　来るんです！」
足早に出て行くミンチン――
アメリア「お、お姉様……」
アメリア、慌てて追う――

17

同・食堂

セーラを囲んで、手に手に贈物を持った女生徒たち――
――ロッティが紙包みをセーラに渡す。
ロッティ「セーラ・ママ……これ、私のプレゼント」
セーラ「まあ、なにかしら」
ロッティ「ウフフ、セーラの大好きなものよ」
セーラ、紙包みを開く――出て来る小さな焼物の子馬。

セーラ「まあ、可愛い……ありがとう、ロッテイ」
ロッテイ「わあい……」
躍り上って喜ぶロッテイ、拍手する女生徒たち。

18 同・廊下

怒りも露わに突き進むミンチンと、追うアメリア——

19 同・食堂

拍手に続いてアーメンガードが、包装した本をセーラに渡す。
アーメンガード「これ、お父さんが読めって送って来たけど、難しくて駄目なの」
どっと笑う女生徒たち——

セーラ「ありがとう、アーメンガード……」

その時、勢いよくドアが開いて、入って来るミンチンと、続くアメリア。

一同、驚いて振返る——

ミンチン「皆さん……パーティは、たった今、終りにします！」

驚いてざわめく女生徒たち——

ミンチン「セーラ……！」

セーラ「はい、院長先生……」

ミンチン「あなたの父親の事で、話す事があります」

セーラ「え、お父様のことで……？」

ミンチン「死んだのですよ」

セーラ「なんですって……」

一斉にざわめく女生徒、マリエットたち。

ミンチン「インドの奥地で、熱病にかかって……しかも、破産までしてです」

セーラ「（愕然）そ、そんな……嘘です……」

ミンチン「（怒鳴る）私が嘘を云うと思ってるんですか。バロー弁護士の許へ、インドから電信が届いたんです！」

セーラ「（茫然）インドから……」

ミンチン「あなたの父親のダイヤモンド鉱山とかは、とんだボロ鉱山だったんです……あなたの父親は、あなたに一ペニーの財産も残さずに死んでしまったんですよ！」

ラビニア、ニヤリとジェシー、ガートルードと顔を見合せる。

セーラ、懸命に首を振る——

セーラ「し、信じられません……お父様がなくなったなんて……だって、お父様からは、あんなに元気なお手紙が来ていたんです」

ミンチン「セーラ！」

ミンチン、いきなりセーラの花の王冠を掴み捨てる。

ミンチン「あなたはもうダイヤモンド・プリンセスなんかじゃないし、この学校の代表生徒でもありません！……学校を出て行くんです！」

茫然と見上げたセーラ、緇えるとドアを飛び出す。

騒然となる女生徒たち――

突然、わっと泣き出すロッテイ。

ミンチン「静かに！……静かにするんです」

独り冷笑を浮べるラビニア――

20

同・三階の階段

夢中で駆け上って来るセーラ、自室のドアへ飛び込む

――

そのあとから、のっそり尾いて来たシーザーが、うさん臭そうにドアを窺う。

その時、駆け上って来るマリエット、ドアに駆け寄り、叩く——

マリエット「お嬢様！……お嬢様……！」

ノブを廻すが、内鍵がかかっている。

21 同・セーラの部屋

床に——点々と落ちているロッテイの呉れた小馬の焼物……アーメンガードの本……。

22 同・寝室

暖炉の上の父母の写真——を、そっと手にとるセーラ。

涙が溢れる。

セーラ「……お父様が……お父様が亡くなったなんて……」

セーラ「ありがとう、アーメンガード……」
その時、勢いよくドアが開いて、入って来るミンチンと、続くアメリア。
一同、驚いて振返る——
ミンチン「皆さん……パーティは、たった今、終りにします！」
驚いてざわめく女生徒たち——
ミンチン「セーラ……！」
セーラ「はい、院長先生……」
ミンチン「あなたの父親の事で、話す事があります」
セーラ「え、お父様のことで……？」
ミンチン「死んだのですよ」
セーラ「なんですって……」
一斉にざわめく女生徒、マリエットたち。
ミンチン「インドの奥地で、熱病にかかって……しかも、破産までしてです」

セーラ「（愕然）そ、そんな……嘘です……」

ミンチン「（怒鳴る）私が嘘を云うと思ってるんですか。バロー弁護士の許へ、インドから電信が届いたんです！」

セーラ「（茫然）インドから……」

ミンチン「あなたの父親のダイヤモンド鉱山とかは、とんだボロ鉱山だったんです……あなたの父親は、あなたに一ペニーの財産も残さずに死んでしまったんですよ！」

ラビニア、ニヤリとジェシー、ガートルードと顔を見合せる。

セーラ、懸命に首を振る――

セーラ「し、信じられません……お父様がなくなったなんて……だって、お父様からは、あんなに元気なお手紙が来ていたんです」

ミンチン「セーラ！」

ミンチン、いきなりセーラの花の王冠を摑み捨てる。

ミンチン「あなたはもうダイヤモンド・プリンセスなんかじゃないし、この学校の代表生徒でもありません！……学校を出て行くんです！」

茫然と見上げたセーラ、翻えるとドアを飛び出す。

騒然となる女生徒たち──

突然、わっと泣き出すロッティ。

ミンチン「静かに！……静かにするんです」

独り冷笑を浮べるラビニア──

20

同・三階の階段

夢中で駆け上って来るセーラ、自室のドアへ飛び込む──

そのあとから、のっそり尾いて来たシーザーが、うさん臭そうにドアを窺う。

その時、駆け上って来るマリエット、ドアに駆け寄り、
叩く——
マリエット「お嬢様！……お嬢様……！」
ノブを廻すが、内鍵がかかっている。

21
同・セーラの部屋

床に——点々と落ちているロッテイの呉れた小馬の焼
物……アーメンガードの本……。

22
同・寝室

暖炉の上の父母の写真——を、そっと手にとるセーラ。
涙が溢れる。
セーラ「……お父様が……お父様が亡くなったなんて……」

崩れるようにベッドの前に坐り込む。
ベッドの上に、無心に坐っているエミリーをとり、抱きしめる。
セーラ「エミリー、聞いて？……お父様が……お父様が……私、そんな事信じられない……いえ、信じたくない……」
セーラ、わっとベッドに泣き伏す——

おわり